

韓国「朝鮮日報」の竹島論議



ふじい・けんじ 島根県竹島  
問題研究顧問。最新稿「駐日各  
国大使館の竹島問題への認識」  
(内閣官房領土・主権対策企画  
調整室ウェブサイト掲載)。

今年7月26日付の韓国の有力紙「朝鮮日報」(韓国語電子版)に掲載され、下條正男島根県竹島問題研究会座長によって「産経新聞」で紹介されたコラム「独島論戦の三つのキーワード?」がある。次の「三つの事実」さえ覚えておけば竹島(韓国名「独島」)問題での日本との論争に勝てるという内容である。

一つ目は、「于山と武陵という二つの島が蔚珍郡の東の海の中にある。二つの島は距離が遠くなく天気が良いれば見ることが出来る。新羅の時は于山国と呼んだ」とある十五世紀の「世宗実録地理志」。この「于山」が「独島」なのだという。

二つ目は、明治政府の最高行政機関だった太政官が「鬱陵島と一島(独島)は本邦(わが国)と関係ないと心得ること」と島根県に回答した1877年の「太政官指令」。これは江戸時代の日朝間の外交文書を根拠にしているので「独島は朝鮮領」と宣言したのと同じなのだという。

三つ目は、鬱陵島を「鬱島郡」に昇格させてその管轄区域に「石島」を入れた1900年の「勅令第41号」。鬱陵島に移住した全羅道の漁民たちが岩だらけの竹島を見て「石島」と名付けた。石は全羅道の方言で「トク」と呼ぶのだから「石島」は「独島」だというのである。

意外にも、コラムへの36件のコメントの中には執筆者への批判的意見が9件もあった。例えば「太宗実録」の「安撫使金麟雨が于山島から帰って島の産物である大竹を献上して、住民3名を連れてきた。その島の人口は大体15戸で男女合わせて86名」という部分は言及すらしないのか? これを見れば世宗実録の「于山島」は独島ではないと見るのが自然ではないのか? このように有利な資料ばかり国民に見せたら、実際に日本人と討論すれば、初め

成果上げつつある日本の主張発信

て見る朝鮮の記録(不利な内容)にろくに反論すらできなくなるだろう」と述べ、コラム執筆者は報道の基本である「客観性」を失っているという批判である。「太宗実録」の引用部分は日本外務省作成の「竹島問題10のポイント」(韓国語版)のままで、それを貼り付けたのだろう。

また、「天気の良い日は釜山から対馬が見える式の記録で対馬が朝鮮領になることはない。独島の位置についての明確な記録とともに朝鮮領であることが明らかな記録がないので混乱しているのだ」というコメントがある。これには、「反日種族主義」からの韓国人の解放を主張した李承晩氏の影響も感じる。「独島」の語源を全羅道方言で説明するのは苦しすぎるというコメントも同じである。

そして、コラム執筆者は読んでいないのだがと揺さぶりながら、「三つの事実」については「日本外務省が出した反論」の方がより説得力があると述べたコメントもある。「太政官指令」は竹島と関係ないと反論したのは外務省ではなく日本国際問題研究所と島根県のウェブサイトである。誤解があるにせよ、2005年の「竹島の日」条例制定以後強化された日本の主張発信が成果を上げていることがわかる。

これらの他、「三つの事実」は根拠が弱い、重要なのは「大韓民国の実効支配」だと現状を正当化するコメントが複数あった。しかし、先月8月15日付「朝鮮日報」(同前)社説が「米国など連合国と日本が締結したサンフランシスコ平和条約で日本が返還せねばならない土地から独島が抜け落ちると、李承晩は1952年1月18日、李承晩ラインと呼ばれる『平和線』を一方向的に宣言した」と書かざるを得なかったように、韓国が竹島で行っているのは「不法占拠」であることも、韓国では発信されている。